

# 生命のにぎわい通信

第78号：令和8年(2026年)4月 発行

発行：千葉県環境生活部自然保護課  
生物多様性センター

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2  
(千葉県立中央博物館内)

TEL:043-265-3601 FAX:043-265-3615

URL:<https://www.bdcchiba.jp/monitor-index>

E-mail:[monitor@bdcchiba.jp](mailto:monitor@bdcchiba.jp)

## 春を告げる渡り鳥、ツバメ

春になるとフィリピンやマレーシアなどの東南アジアから渡ってくるツバメ。日本に来る目的は子育てです。ヒナに与える小さな虫を求めてはるばる飛来します。何だか東南アジアにとどまる方が、日本に来るよりたくさんの虫を食べられるような気がします。実は冬の間ほとんど虫のいない日本は、春になると熱帯地方よりもはるかに大量の虫が一度に発生するのだそうです。そう言われてみると、昨年開催された大阪万博のユスリカ大量発生などが思い当たります。ついつい厄介者扱いしてしまいがちな虫たちですが、子育てのため3,000km以上を旅してやってくるツバメにとっては大切な食料となります。

にぎわいの季節報告、ツバメ（初飛）は令和8年3月18日が今年の初報告でした。人のいる場所を選んで巣を作るツバメが、安心して子育てできる環境を私たちはいつまで守っていただけるでしょうか。

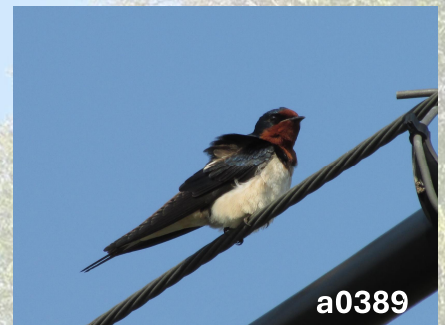
## ツバメのプロフィール

ツバメは学名を *Hirundo rustica* といい、スズメ目ツバメ科に分類されます。くちばしの先から尾羽の先端までの全長は17cmほどですが、そのうちの10cmくらいは二股に分かれた長い尾羽が占めています。翼は細長く、広げた長さである翼開長は32cmと図鑑にあります。これをスズメの全長14.5cm、翼開長22.5cmと比べてみると、体の割にツバメは翼が大きいことがわかります。ツバメの持つ細長く大きな翼と長い尾羽、小さく流線型の胴体は、急旋回やホバリングなどの曲芸飛行と、渡りに必要な省エネルギー型長距離飛行の両方を可能としています。

空中を自由自在に飛び回るツバメ。水を飲むのも水浴びをするのも飛びながら行い、地上で活動することはめったにありませんが、巣を作る時だけは巣材となる泥を取るために地面に降りてきます。

卵を産み始めるのは3月末か4月頃です。1日に1つずつ5~6個ほど産み、最後の卵が生まれてから温め始め、約2週間ほどで孵化します。巣立ちはおおよそ3週間後。ヒナはその後もしばらくは巣の近くにとどまり、親から餌をもらいながら自分で餌をとる練習を始めます。この通信がお手元に届くころには、そろそろヒナが孵っているかもしれません。

皆さまから寄せられたツバメの写真を一部ご紹介します。写真下は団員番号です。(千葉県生物多様性センター 松坂 麻美)



参考文献：北村亘著『ツバメの謎』誠文堂新光社(2015)

写真 宮本桂・ポンプラボ編集『にっぽんツバメ便り』カンゼン(2018)

解説 安西英明・絵 谷口高司『野鳥観察ハンディ図鑑 新 山野の鳥』日本野鳥の会(1998)

最新の生物多様性に関する情報や各種講習会の情報は当センターと調査団のホームページをご覧ください

調査団:<https://www.bdcchiba.jp/monitor-index> 生物多様性センター:<https://www.bdcchiba.jp>



# 第1回 青葉の森公園に暮らすタヌキ

千葉県生物多様性センター 金城 芳典

私たちの身の回りには、さまざまな生き物が暮らしています。生き物たちには、その姿や生き方に個性があり、それぞれが関わりあって生命をつなげています。生き物を知ることはそのつながりを知ることであり、生命のにぎわいを守ることにもつながります。そこで、今号からは生き物の話題についてリレー形式でつづっていきたいと思います。

千葉県立中央博物館がある青葉の森公園には、タヌキが暮らしています。公園を歩くとタヌキへの餌やりをしないように注意する看板などがあることから、最近は人とタヌキの距離が近くなっており、その数も増えているのではと感じています。では、タヌキたちは公園でどんな暮らしをしているのでしょうか。私は1996年から1998年にかけて、青葉の森公園に暮らしていたタヌキの「ポン」に発信機を装着し、調査を行いました。その際に分かったタヌキの暮らしについてご紹介いたします。

調査したポンは、頭にプラスチック容器がはまり、抜けなくなって衰弱していたところを生態園で保護された個体です。その際、確認したところメスの0歳もしくは1歳の若いタヌキということが分かりました。その後、ポンは回復したため発信機を装着され、1996年の10月15日に、生態園で放されました。

調査は、1996年10月15日から1998年4月21日までのうち153日間、実施しました。私は最初から調査していた訳ではなく、その当時、博物館で研究員をされていた方から誘われて途中から参加しました。発信機の調査は、八木アンテナと受信機を持って、ポンがどこにいるかを調べるものです。このときは、1回の調査あたり2時間おきにポンの居場所を探すことを24時間行い、ポンがどの場所を利用しているかを調べました。

この調査結果から、ポンは青葉の森公園からその北部の住宅街も含む42.4ヘクタールの範囲で暮らしていることが分かりました。利用する環境は樹林地や植え込みが多く、面積的に大きい芝地やアスファルトはほとんど利用していませんでした。面白かったのは、休憩場として西洋庭園の地下にある雨水管を利用していたことです。雨水管の利用は、気温と関係しており、1日の平均気温が20℃を下回ると利用し始め、5℃を下回ると100%の割合で雨水管を休憩場として利用していました。また、1月には雨水管からまったく出てこない日もあったことから、冬の寒さから身を守るシェルターの役割を果たしていたと考えられます。冬の休憩場は雨水管を利用していた一方、春から秋には定まった休憩場が無く、樹林地の中の笹やぶや竹林、草丈が高い草地などを利用していることが分かりました。どうやら青葉の森公園には、1年を通じてタヌキが昼間にゆっくり休める場所が無かったようです。この調査結果は千葉中央博自然誌研究報告6(1)に掲載されていますので、よろしければご覧ください。

あれから30年が過ぎ、公園の環境も変わり、猫やアライグマなども見られるようになってきました。今のタヌキがどのように暮らしているのかとても気になります。



## <これからの季節に観察できる生き物>

○調査対象種：ヒガシニホントカゲ、カワセミ、キジ、サワガニ、モリアオガエルなど

○調査対象種以外

- \*渡りのヒタキ類、サシバなどの猛禽類
- \*各種昆虫、両生類、爬虫類など
- \*希少生物(生息地・生息数が減少している生物)、外来生物の報告も受け付けています。

調査対象種以外は種の確認が難しいため、できるだけ写真の添付をお願いします。



## 「生命のにぎわい調査団 現地研修会」のご案内 初夏の梅ヶ瀬溪谷で生き物を観察しよう!

梅ヶ瀬溪谷は、養老川支流の梅ヶ瀬川により形成された溪谷で、淡水魚類や両生類・爬虫類等の様々な生き物が生息しています。今回の研修では初夏の梅ヶ瀬溪谷で採集等を行いながら生き物を観察します。

- 開催日(荒天中止)  
令和8年5月24日(日) 9:30~11:30(予定)
- 定員: 30名(申込者多数の場合は抽選)
- 対象: 小学生以上(要保護者同伴)
- 申込締切: 令和8年5月14日(木) 必着(メール、郵送またはFAX)
- 詳細は申込案内書をご覧ください